

平安・鎌倉期における男性文人の物語創作と享受をめぐって -漢籍受容の問題-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-07-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 芝崎, 有里子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19567

2017年度 文学研究科

博士学位請求論文（要旨）

平安・鎌倉期における男性文人の物語創作と享受をめぐって

——漢籍受容の問題——

日本文学専攻
芝崎 有里子

1 問題意識と目的

平安時代に作られた物語のうち、『源氏物語』以前の作品は、主に身分の高くない漢籍の素養のある男性官人により著されたと考えられてきた。いわゆる男性文人である。その特徴のひとつが作品内に漢詩文の引用がなされていることである。しかし、平安前・中期の『源氏物語』以前の作り物語は、資料に乏しく具体的な作者名が分からないことから、漢籍典拠についても、作者個人とその典拠の関係にまで掘り下げて考えることは困難である。また、文学史上の位置づけとしては、『源氏物語』に至るまでの基盤形成期として捉えられることが多く、『源氏物語』が出現すると、男性文人の物語創作は埋没してしまう感が否めない。このような研究史的状況下で、物語作者としての男性文人と作品への漢籍引用の問題を軸に、『源氏物語』以降の動向までを見渡した研究は、これまでさかんに行われてきたとはいえない。

そこで本論文では、平安期の『源氏物語』以前の作り物語における漢籍受容について見直すと同時に、鎌倉期について翻案説話や、さらには『源氏物語』注釈書内の漢籍典拠の指摘を検討することにより、男性文人の物語創作と注釈の関係を明らかにしたい。さらにこれら鎌倉期の男性文人による創作や注釈のルーツとして、平安期における男性文人の物語創作が位置づけられることを提示し、その文学史的価値を見直すことを試みる。

2 構成及び各章の要約

本論文は、序章に続き、第Ⅰ部では平安期の『源氏物語』以前の男性文人による物語創作の問題、第Ⅱ部では創作と注釈の中間に位置するものとして鎌倉期の翻案説話、第Ⅲ部では注釈の問題として鎌倉期の『源氏物語』注釈を扱う。そして終章で、物語を創作することから、物語を読んで解釈を示すことまでを見渡し、平安・鎌倉期の男性文人による物語創作と享受の文学史的意義について言及する。

まず、序章では、上述した問題意識や研究目的に加え、作者とされる男性文人の社会的位置付けと、漢詩文を主な教養とする彼らにとって、仮名で物語を執筆することはどのような意味をもっていたのかについて述べた。彼らは公的な世界では官職にめぐまれない不遇な存在であり、私的な領域に属する仮名で創作することは、単に物語の主な読者とされる女性たちに作品を提供するだけでなく、日頃の不満を晴らす自己表現の手段でもあったことを、先行研究をふまえて確認した。

第Ⅰ部では、平安期の男性文人による物語創作そのものの課題として、『落窪物語』（長保2年〈1000〉頃成立）をとりあげた。『落窪物語』は男性文人の作とされながら、あまり漢籍受容の研究が進んでいなかった作品である。そこで本研究では新たな漢籍典拠を指摘することを試みた。

第一章では、先行研究で指摘されている漢籍典拠を、引用の形態別に分類・整理し、『落窪物語』内に漢籍受容を求めることが研究方法として妥当であることを確認した。

その上で、第二章では、『落窪物語』の主人公たちの恋愛が進展していくプロットの基盤として、唐代伝

奇『遊仙窟』が踏まえられている可能性を提示した。さらに、それらの中には、すでに受容が指摘されている唐代伝奇『鶯鶯伝』との重層的な引用であると考えられる部分もあることを指摘した。

第三章では、登場人物の一人である面白の駒が描かれた意義について再検討した。面白の駒は、不才にも関わらず貴族社会に立ち交じらう「しれもの」として周囲から嘲笑されている。この「^{しれもの}白物」や「痴」は、仕官と関わる概念で、源順「高鳳が貴賤の交りを同じくするを刺る歌」（『本朝文粹』所収）のように漢文作品のテーマにも選ばれるなど、男性文人にとって関心の高いテーマであったことを明らかにした。物語創作に私的な充足をもたらす作用があるとすると、物語内で「しれもの」である面白の駒を嘲笑することは、学識があるにも関わらず沈淪する作者の憤懣を晴らす意図があったものと思われる。

第Ⅱ部では、男性文人による創作と注釈の中間に位置するものとして、元久元年（1204）に成立した『蒙求和歌』と『百詠和歌』について、作者である源光行の参照した典籍を明らかにすることで、その表現や創作意図を考察した。源光行は紀伝道の学者藤原孝範に漢学を師事しており、博士家の周辺に位置する文人といえる。『蒙求和歌』や『百詠和歌』は、『蒙求』『李嶠百詠』注本所収の故事を光行が仮名の文章にしたたものである。しかしながら、単に漢故事を和文脈にただけというにはおさまらない、創作的な部分を持ち合わせた翻案説話であるということが出来る。その一方で、漢故事に対する光行の解釈を示すものでもあることから、注釈書としての性格をも有している。

第一章では、比較的研究が進んでいる『蒙求和歌』について考察した。同作品内では一貫する方針として、「なさけ」ある為政者が理想とされており、もとの古注『蒙求』の記述を改変して、「なさけ」ある人物の慈悲深さが強調されるように描こうとしていることを明らかにした。その中には、単に「仁」の訳語として用いられている例だけではなく、話の展開を改変してまで慈悲深い為政者を創出している例も見受けられた。

第二章では、研究があまり進んでいない『百詠和歌』における光行による漢故事の改変を検討した。本作品の第一天象部「月」に引用されている破鏡説話では、もともとは、妻の不義密通の事実のみを叙述した話であったものを、それにまつわる夫婦それぞれの苦悩や人生の生きがたさへと主題を深化させていた。これを光行の破鏡説話に対する解釈を反映したものであるとすると、注釈的なものと捉えることができ、またその解釈を一つの説話として物語展開の中に入れ込んだという意味では物語創作に相通じることが出来る。

第三章では、同じく『百詠和歌』の第二坤儀部「野」の傳説説話について、平安期における傳説説話の受容を踏まえた展開に内容が変容していることを明らかにした。また、自身が捉えた登場人物の心情を、光行は和歌の伝統的な表現の中に示していた。読み取った心情を解釈し説明したという点においては、『百詠和歌』の注釈的な部分のひとつであると言える。また、自身が持ち合わせている教養と、中国の故事から読み取ったことを光行がどのように接合していたのか、その一端を提示することができた。

第Ⅲ部では、建長4年（1252）から文永4年（1267）頃にかけて編纂された『源氏物語』の諸注集成である『光源氏物語抄』をもとに、博士家の学者とその周辺に位置する男性文人たちの注釈を考察した。

第一章では、従来議論のある『光源氏物語抄』編者が初学者であるかどうかについて、その注釈態度検討することにより、初学者ではないことを示した。編者の具体名を特定するには至らないが、実証的で緻密な注釈を重んじる一方で、個々の表現の細部よりも内容の一致を重視するという大きな視野をも兼ね備えていることを検証した。

第二章・第三章では、『光源氏物語抄』の経書引用について考察した。まず第二章では、素寂注が『尚書』などに見える中国の聖人周公旦の故事を多用し、光源氏に理想的為政者像を見出そうとしたことは、素寂の父光行が『蒙求和歌』において「仁」の訳語として「なさけ」を用いて理想的な為政者を創出するなど、仁徳ある為政者を重んじたことと通底するのではないかということ指摘した。またこの周公旦の故事を多用していることについて、素寂の漢籍引用の傾向という視点からも検討した。

第三章では、『光源氏物語抄』編者の経書引用を検討することで、編者が経書を用いて『源氏物語』を理解することに積極的であったこと、またそうした把握の方法を促進させた要因のひとつとして明経道の学者

清原教隆の注釈があったことを述べた。その上で、このような経書引用に積極的な編者の注釈書に、第二章で扱った『尚書』を用いた素寂の注釈が引用されることにより、光源氏の須磨流離を『尚書』の周公旦故事に沿って理解しようという素寂注の妥当性が増したのではないかということを描した。

第四章では、『光源氏物語抄』桐壺巻にみえる「俊国朝臣」が、紀伝道の学者藤原俊国であることを明らかにした。また、俊国は御前談義で、弘徽殿女御をはじめとする他の女性達が、帝の寵愛を受ける桐壺更衣にしかけた「あやしきわざ」について、『後漢書』皇后記第十上の鄧皇后の故事に基づいて呪詛であるという見解を示した。これは、陰皇后が和帝の寵愛をうける鄧皇后を排除するために構えたものであり、俊国は、『後漢書』の陰皇后と鄧皇后の関係により、『源氏物語』の弘徽殿女御と桐壺更衣の人間関係を理解していたことがわかる。また、『後漢書』は俊国にとって代々家学を継承してきた書物であり、皇后紀第十上を亀山天皇に進講したこともあることから、源氏学と家学のつながりを史料に基づいて明確にすることができた。

終章では、個々の考察を踏まえて、平安期の『源氏物語』以前の男性文人による物語創作を継承するものとして、鎌倉期の博士家を中心とした文人たちの翻案説話や『源氏物語』注釈が位置づけられることを論述した。文学史的な流れで言えば、まず、仮名の物語を語るために漢の要素を取り入れたのが平安期の『源氏物語』以前の物語、続いて漢故事を語るためにそれらを和文脈に直し、時には物語や和歌の要素を取り入れたのが翻案説話で、これは物語創作と注釈両方の性格を有していた。また、和に漢を接合させることも鎌倉期の『源氏物語』注釈書内の漢籍典拠の指摘に継承されている。漢籍典拠を指摘し注釈を施すことは、まずは読み手による読書行為であると言ってよい。しかし一方でそれは、仮名の物語である『源氏物語』に新典拠としての漢籍を接合させて、新たな物語世界を提示していることにもなり、平安前・中期の男性文人たちが漢籍を引用し和文脈の物語世界を構築していったことと近似していると言えるのである。一つの作品の中に創作と注釈の要素をあわせもつ鎌倉期の翻案説話のみならず、文学史の大きな流れから見ると、鎌倉期の源氏注釈もまた、漢籍受容という側面において平安前・中期の男性文人の物語創作を継承する文学行為として位置づけられる。鎌倉期の男性文人、その中でも中核に位置する博士家の学者たちが、『源氏物語』の漢籍に関わる注釈を残したのは、専門家の知見を重要視する当時の風潮によるものである。また、鎌倉期は、博士家の学者の立場も重要性を増すと同時に、『源氏物語』の作品としての地位も上昇していた。そのため彼らの『源氏物語』注釈は、平安期の男性文人の物語創作にくらべ、専門性の高い権威ある文学行為として位置づけられていたと考えられる。

しかし彼らの注釈が要請されたのは、そもそも『源氏物語』に漢籍が引用されているからであり、物語に漢籍が欠かせない要素になったのは、『源氏物語』に至るまでの物語創作が、主に漢詩文を本業とする男性文人によって担われてきたことによる。つまり、本論で検討した『落窪物語』までの平安前・中期の男性文人たちの物語創作は、鎌倉期における専門性の重視と呼応して、博士家の学者たちが、『源氏物語』の注釈に関与する遠因となっていると言えるのである。